発想転換による日本絹織物業の再構築

京都 西陣 HINAYA GROUP ｸﾞﾙｰﾌﾟ代表
自然染織作家　　伊豆蔵 明彦

○　伝統産業の現実

まず自分のことを簡単に紹介させて戴きます。親が伝統産業の西陣織を家業としてやっていたのですが、ちょうど大学１年生の時分に、「大学行ったんならアルバイトでもせよ」ということで、４月に入学すると同時にアルバイトをすることになりました。わたしは経済学部ですが、大学を卒業すれば、将来は繊維、つまり「ファイバーアート」の世界で仕事をしていきたいというゆめを持っていました。「アーティストの道を歩めばどうか」というのが、わたしのおおむね、大学に入る時の気持ちでありましたが、いずれにしろ将来繊維をなぶるんだったら、よそへ手伝いに行くより、我が家の、といってもごく５，６人の職人を集めた家業集団なんですが、それを「手伝え」ということでした。それでまあ小遣いがもらえるならというなら「ほな、やってみよ」ということでやりだしたのがこの世界であって、こんにちのこれからお話する方向へ進んでいったもとになりました。

大学のオリエンテーションが終わった４月 20 日すぎからアルバイトを始めました。手織の職場、西陣の帯を織る職場を手伝い、また、でき上がった製品を室町の問屋さん、流通業に持ち運ぶというようなことをやりながら、非常に不思議に思ったことがいくつもでてきました。それで、自分の親父とけんかばかりをしておました「やっていることがさっぱりわかりにくい」ということでけんかばかりしたのです。いきなり室町の問屋さんにでき上がったものを持っていって「いかがなものでしょうか」と言ってものを売るのですが、なかなか、その買い方がさっぱりわからない、もうひとつこう腑に落ちないということもあって「何というおもしろい社会なんだろう」と思うようになったのです。

西陣織の社会は、コピー社会を非常に集約したものだといえまして、要するに、その当時は 2,000 社近い零細企業が西陣織りをやっていましたが、そこで作られているもののほとんどはコピーだったんです。どこかで売れたもの、それを写す。まあ盗作ですね。そういうものが幅をきかしていたわけです。

もともとオリジナルと言われるものも、ほとんど過去の遺産のコピーで、それ

を少しアレンジした程度のコピーです。また本物を作ったといわれる人も実は歴史のコピーであるということがありましすが、それが本物として通っている。それがうまく売れるとそれをまたコピーする。そしてまたコピー屋さんが次のコピーを真似する。こうして三角形のピラミットを作っていくというようなかたちです。

○　何のために織物を作るのか？

しかし、学生という立場で子供の目線の低い位置からみてみたんですが、どれが本物で、どれが嘘かわからず、どれも一緒にしか見えなかった。「いったい人間やこういう大人たちは、どういう理由で、伝統産業での仕事をしているのか？」ということが、最初に行き詰まった疑問点でした。それは５月早々ぐらいでした。それでも、当時は地場産業としては２万数千人の就業者がおりましたが、その人たちがみんな一生懸命切磋琢磨し生業をたてていました。そういうなかで、「なぜ人間が織物を作るのか？」また、「そのことの意味がどこにあるのか？」ということから調べいかないと、自分としては納得できないと思いました。

「何のために織物をつくるのか？」ということが、社会へ出ていちばん最初の自分自身に対する質問でした。これを、大学を出るまでに、アルバイトをしながら解き明かそうというのが当面のテーマとなりました。昼はアルバイトをし大学にもいく、そして夜は自分の部屋で織物の歴史をさかのぼっていくことにしました。人間、人類が「１本の糸」を作り上げるところまで遡れば、織物を作る理由・根拠というもの「原点」として見えるのではないかと思ったのです。

○「１本の糸」への旅

まず時代の新しいところからさかのぼって行くわけですが、当時の西陣の織物、それから明治、江戸、中世、そして奈良。それから先は海を渡り中国へ行き、遙かシルクロードを通って中近東へ、またアフリカといったように紀元前の世界まで織物を追っていきました。しかし、そこまでさかのぼった時、大学４年間のタイムリミットが過ぎてしまい、１本の糸までたどり着くことができませんでした。ですから、社会人になってもアーティストの方向へ進むというのではなく、まだ研究を引きずっていくことになりました。

仕方なく大学を卒業して、家業を引き継ぎながらその研究を続けることにしました。昼間は家業をし、夜は研究です。そしてどう計算しても「わたしの一生の

うちに１本の糸にたどり着くのは難しい」ということと、「織物を遡るということ、分析するということをひとつひとつ丁寧に汲み上げていくということが難しい」ということが分かりました。そこで初めて、スタッフを使って「手分けしてやろう」ということを思いつきました。家業を成長させていって企業化し、その果実で研究スタッフを増やそうと考えたので、家業に力を入れ、研究員を１人、２人、３人、４人と置いていき、歴史をどんどん遡っていきました。

そして今から 13 年前、大学へ入ってから 30 年前後かかってようやく一本の糸までたどり着きました。そのとき、一本の糸にたどり着いたときの研究スタッフはおよそ 40 名おりました。その 40 名を育成するだけの素材、あるいは材料費、あるいは人件費等を賄うために伝統産業の西陣織の、しかも手織の織物をずっと織り続けていました。研究員を増やすたびに企業規模を少し大きくし、その費用に対して充当するということをしてきました。

自分なりの結論は、一本の糸は「人間の永遠への祈り」から生まれたのだということです。こうして 18 歳の時に持った最初の疑問を解決できたので、「これでやっと終わった」と周りを見回した時には、家業から企業になっていましたし、手織の職人や手織工場を取り巻く人たちもすっかりわたしとともに白髪頭になってしまっていました。だからわたしが「もうここで終わったから、本来の社会人になった時に抱いた夢を実現したいから、みんなここで解散しようじゃないか」ということが言えなくなってしまった。そこで今までやってきた人類の繊維の歴史、テキスタイルの歴史をこれからの社会にどう役立てるかということで、今まで研究を補佐してくれた人たちとともにこれからの時代を過ごそうということになりました。ですから、企業活動としてはようやく 10 年経ったところです。

これから、この 10 年間の企業活動と、今後のあゆみについて、伝統産業に新しい展望と革新をどのように与えていくかということで、生産システムについてこれからみなさん方にお話させて頂きたいと思います。

○森から生まれた、森の技

みなさん方が生活している現在、周辺にある技術、技はどこから生まれてきたものでしょうか。私が今日お話しするのは、「森から生まれた、森の技」と申し上げております。ほとんどみなさん方が今、意識され、あるいは注目されているところの技は、ある時は工場であったり、ある時は大学の研究室というところから生まれてきたのではないでしょうか。本当の森のなかから生まれてきたものと

いうのは、日に日に、この日本の社会から、あるいはこの地球上から忘れられていく、世代が交代するたびに忘れ去られていくというのが世界の流れだと思います。デュマ・エルメス社長もそのことを非常に嘆かれておりました。一昨年、彼がパリのエルメスの本店で上得意を850名ご招待したとき、そのときにわたしをゲストとして呼んでいただきました。そこで、「森の技」についてお客様方にお話しさせていただき、あるいはそういうデモンストレーションをさせていただきました。ヨーロッパ、あるいはパリにおいても同じような問題、しいては同じ伝統的歴史を持つ日本も同じことが言えるのではないかと思います。

ほとんどの方が、「森の技」ということが意識のなかから消えて行っているでしょう。この「森の技」をルーツとしてやってきているのは、日本のなかで京都が非常に多いのではないか、またその基盤をルーツとしているところが非常に多いではないかと思います。現在では、「森の技」を基にして発展してきた企業は、ほとんど「森の技」ということから目が離れてしまい、それ自体の意義を見失っているという状況です。やっている人自体が見失っているわけですから、当然、若い世代に「森の技」を伝えていくということ、あるいは「森の技」の意味を伝えていくということは、やや薄れているのではないかと思います。そのことから、現代社会は、要するに工場から生まれた、試験管から生まれた、あるいは実験のなかから生まれた技が、こんにちのみなさん方の生活を取り巻いているのではないかと思います。

「森の技」というのは、いわゆる「森の資源」にその原点があります。わたしは仁和寺のそばに住んでおり毎朝歩いて通勤しています。毎朝6キロぐらいの道のりを会社まで歩いていますが、この道々のクヌギの葉っぱと葉っぱのあいだに巧妙に「繭」が隠されています。クヌギの葉っぱのなかを見ますと、あるいはドングリの木を見ますと、「繭」が見えます。これは普通に意識せずにいたら、まず分かりません。よくよくみますと、続々こういう繭が見つかります。

○蚕がつくる「森の技」と絹の不思議

蚕というのは「天の虫」と書きます。天からさずかった森のなかの天からいただいた虫、「お蚕さん」と言いますが、「繭」というのは非常におもしろいです。わたしが10日間、ウィーンへ行った時は、着替えはひとつも持っていきませんでした。ジャケットもこのままです。わたしは家に帰りますと、ひと月にいっぺん、このままシャワーを浴びます。それで順番に脱いでいきます。石けんは使い

ません。でも絹は汚くないんです。解毒してくれるんですね。しかも、ジャケットはアイロンもあてたことがない。このジャケットはもう８ヶ月連続で着てます。シャツは１週間にいっぺん。下着は、毎日風呂に入ったときに一緒に洗うだけです。わたしは廃棄物ゼロかもしれませんけども、「着替えもゼロ」なわけです。そういう生活をしています。

この「繭」の中で蚕は生活しています。1,300 メートルぐらいのシルクの繊維のなかでは、紫外線がカットされ、この中でさなぎにまで成長します。そしてやがて成虫になってこれをぶち破って蛾になって出てくるわけです。それまでのあいだすべてこの繭の中で生活しているわけですね。排尿、排便すべてしています。でも全部それは解毒されて、なんら腐敗することない作用がこの中に含まれています。生まれた生命体を完全に包みこんでいるのです。こういうことを人類が見つけて、こんにちの絹になりました。これは森で生まれた技術であり、考え方です。それをわれわれが京都でこんにちまで何千年、まあ４，５千年とも言われてますけども、えんえんと人類が築き上げているのです。

これが非常におもしろい。この天の虫と書かれる蚕は、実にうまい具合にできています。繭は「無限大」（∞）の印のかたちに首を振りながらずっと丸い部屋をつくっていきます。そして自分で体一杯に桑の葉を食べて、そして全部繭として吐ききって部屋をつくるんですね。全部球体に、無限運動をしながら球体に部屋をつくっていく。ですから繭をほどきますと、こういう８の字のかたちが鮮やかに残されています。これは極めて自然の運動に同化した。太陽系の動きをそのまま模倣した昆虫のなかでの知恵だと思います。

企業活動でも人間の生命でも、あるいはものの考え方でもいちばん長く、無限に近づけるということについては、やはりこういう円の軌跡、円の軌道に則った、宇宙の法則に準じたものほど長く続くのではないかと思います。地球上のなかで繭はいちばん長い繊維です。無数に繊維というものはありますが、いちばん長い繊維を作っているのがこのお蚕なのです。これが「森の技」なのです。

この絹資源に、どう付加価値をつけて、現代の社会に活かしていくかというのが、わたしどもの仕事の役目です。わたしはこの 10 年間、このことをテーマにして考えることにしました。絹というのは、大汗をかいても洗わなくていいんですね。綿の布についた汗を放っておくと臭くなります。絹はどんな汗をかいてを放っておいても、乾いたら全く匂いはありません。みなさんもチャンスがあれば試してください。脱臭してしまいます。不思議なものです。

だから本来絹というのはそんなに洗濯しなくてもいいんですが、わたしなんか戦後の工業社会で育成されたから仕方ないですけども、泡が立ったらきれいになっているというように思わされるぐらい、コマーシャリズムにのせられています。

本来、これは水で、お湯でサッと洗って絞っておくだけでいいんです。わたしは現在そうしています。基本的には洗剤も使っていません。また、非常に快適です。これを着出すと、ほかのものが着られなくなります。だんだんボロボロになって、穴が空きだしてくると、ますます手放したくなくなる。下着なんてレース状に透けてくるようになってからが最高です。うちの家内が「恥ずかしいからそんな服着ていかないでください、もし人に見られたらどうするんですか、わたしが笑われます」と言いますが、そのぐらいでも着ていると本当に気持ちがいいんです。

○循環型生産システム

こういう繭資源にたいして、現在までは直線型の「大量生産システム」というものが多くありました。けれどもわたしが申し上げたいのは、中規模の「循環型生産システム」というものを、繭資源を中心にわたしどもの企業活動でやっていこうとしている点です。まあ直線型というのは大量に、一極集中で生産して、ダッと流して合理的にして効率を上げいくというやり方です。循環型というのは、これは自然の原理から学ぶことが非常に多いわけです。たとえばある生物が自然界に糞尿を落とすと、その糞尿を食べて生きている虫がいます。あるいはバクテリアがいます。またその食べた虫の排泄物を食べて生きているものがいます。こういうように循環していって、リサイクルをしている。自然の観念に則った方法論で絹資源を利用していこうというのがわたしどもの考え方です。

○「資本」の生産性向上から「資源」の生産性向上へ

ということは、今までの企業活動のなかで今社会に求めてきたことは「生産性の向上」ということが非常に大事なわけですけども、この循環型における廃棄物ゼロの世界の考え方では「資源の生産性の向上」ということが大事になります。資源の生産性。今までわたしどもが経験しているほとんど生産システムでは、資本の生産性、あるいは労動力の生産性を上げるというのが、製造会社の鉄則でした。そして優良な絹糸も、くず糸を廃棄してしまって、そして機能的で美しい、お客さんが美しく見えるといってくれるものを作って、どんどんと直線的に落と

し込んでいくという考え方が支配的でした。

一方、その廃棄されていくそのくず繭を活かしていこうとして利用するのが循環型のシステムです。わたしは絹資源、森の資源というのはそうでなくてはならないと思います。なぜかといいますと、森の資源というのは、天然更新をする。リサイクルの素材、資源です。あと天然資源のなかでは、石油・石炭、鉱物、天然ガス、これは、有限な資源です。地球の歴史がつくり出した遺物・遺産です。われわれは今これをどんどん使って、どんどんとなくしています。一方「森の技」から生まれる森の資源というのは、刈ったら翌年また生える。日本の和紙は、春刈ればまた秋おなじく生育する。そしてまた秋に枝を切る。そして春と秋に2度、和紙の原料をとる。そして年中循環してやっていくという考え方がわれわれの周りにあります。絹もそうした循環生産です。

ですから資源の生産性の向上をこれからわたしどもは考えていこうということをめざしています。これは、資本・労働の生産性向上から、原材料となる資源の生産性向上をめざすということです。ここには、まだまだ現代社会に天然資源のなかで向上させる余地が大きく残っています。今までどんどん捨てていったものを、もう一度、収益資源として生かしていこうという考え方になります。

○「規模」の生産性向上から「範囲」の生産性向上へ

次に、もうひとつ「森の技」の廃棄物ゼロ世界で守らなければならないことは、「範囲の生産性」の実現をすることです。あるエリアのなかの生産性の実現をめざすことです。今まではどうでしょうか。いま日本をリードしているほとんどの生産は、大量生産と標準化ということを追い続けてきました。そしてさらに、それによってものがあふれ返るという傾向から、次のステップアップが多品種少量と、ジャスト・イン・タイムというのが生産システムの推移とみれます。こういう生産システム、ジャスト・イン・タイムのその代表たるものはA社自動車、世界に冠たるA社自動車はジャスト・イン・タイムで世界を制覇していますが、こういった生産システムは広範な、広いマーケットを一元の管理によって、量的な成長による、いわゆる「規模の経済性」というものを狙った、大きさで勝負をしたものであると言えます。

一方このゼロ・エミッションの関係づくりでいいますと、たとえばいまのように要らないものをどんどん捨てて、必要なものだけを原材料として使うのではなく、天然資源のなかで使って要らないものを、廃棄処理するのではなく、同じエ

ネルギー、同じ費用をかけるのであれば、次の収益資源に変えて活かしていこうという考え方をすることになります。当然この事業化においては、大企業化、規模の経済性ではなく、ある地域のネットワークの、あるいは地域の生産システムの関係がなければできないということになります。そういう意味では、いままで中央一元管理、中央中心的な量的拡大、大量生産システムから、地域で、その独自の産地形成をしていくというかたちの中規模の産地、あるいはある地域における範囲の経済性というものが生まれるのではないかと、わたしは思っています。ですから中央に帰属しない、地域の経済、中規模単位がいちばん適したものになります。地域で自立した産地、そしてそれは多様性を生み出していく。一律な一元化ではなく、多様化のなかに存在していくということが求められるのではないかと思います。

○「資源の生産性」を高める試み～廃棄物ゼロ

こんにち、地球人口は、57 億人ともいわれています。現在 1 年間に 8,700 万人ぐらいの割合で増加しています。この将来、食糧をどうするのか。エネルギーはどうするのかと考えると、新しい資源を見つけださなければならない。また、いままでの資源の活用の仕方を見直していかなければならない。そういうことからして、新しい資源の活用について考えなければならない。とくに京都という場において。歴史的伝統産業のなかにおこなわれてきた、真理、原点というのはそこにあるのではないでしょうか。決して歴史的古さを守るのではなくて、自然と人間との「共生」というものを、バランスよく作り上げていくための知恵であったのではないだろうかと思います。それをこれからの世代の産業としてどのように取り入れていき、どのようにしてそのバランスをとっていくかということが重要になります。

わたしどもは、繭の真ん中のいいところの製品・商品をつくると同時に、くず繭からは身の回りの製品を作っています。そしてまた染色においてはすべて自然の素材を利用して行っています。その自然素材は昆虫であったり、玉ねぎの皮であったり、あるいはあかね草の根っこであったり、あるいは栗のいがであったりします。たとえば栗のいがは、丹波の和菓子屋さんが中をくりぬいた後、いがと皮をわたしどもが全部いただいて、それを使う。それから玉ねぎの皮は、泉州の畑で、玉ねぎが掘られた後、あるいは海外から輸入されてきた玉ねぎを、そして家庭用に薄く皮をめくって土を取り払った、その土付きの玉ねぎの皮を使って、

染め上げています。それをトラックで配送していただく。

そうすると、わたしどもから、産業廃棄物というのは現時点ではゼロです。それを企業グループとして、生産のなかでやっているのがわたしどもの企業グループです。これは非常にたいへんなことです。織物、糸やシルクという素材、それから染めるための染料、そこから自然素材の廃棄物、主に再利用できるものを利用する。

今日も神奈川県の熊笹のエキスを作っているずいぶん古い薬草屋さんからですが、その熊笹からエキスを絞ったときに出る、最後の繊維カス、どろどろしたものから色素が抽出できるということで、わたしどもが一部それを導入させてもらうことになりました。本来自然の色では、ススキの黄色と、藍染めの青を混ぜて木の葉っぱのような緑色を出します。でも不思議なことに熊笹は一つの繊維でこの緑の色がでます。自然染色の中で緑という色はなかなか出せません。薬草屋さんでは廃棄物として月産3トンの熊笹のカスが出た。それを色素に転換できれば非常に有力であるとおっしゃってられました。わたしどもはそれを色素として使って、そしてその後それを灰にして、さらに釉薬として陶芸に使うというようにしています。

○人になじむ技術

「そんな周り道をして何になるのか？」「そこまでこだわって何を考えているのか？」ということをよく言われますけども、染料にしても、化学染色はパウダーで簡単に染まりますけども、こういう植物染色は煎じて、さらにミネラルのある水と加えて色素を出します。化学のパウダーで一瞬に出してしまう色とはずいぶん違います。時間的にも、コスト的にもかかります。でもこのコストをどう乗り越えていくか。化学製品とどう対抗していくかということです。そしてその結果、おもしろいことに化学染料と自然染料で染めた色の差、あるいは自然繊維と化学繊維の人間にとっての差というものについて、やはり大きな差があるように思います。

まあこれは我田引水になりますから、大きくは採り上げませんが、わたしどもの衣類にたいする、天然染料にたいする考え方は、自然の色で染めた色は極めて穏やかでありますし、自然界、あるいはこの環境に非常に順応性があります。しかしながら化学染料で染めた色は、非常に異質感があって、際だって、鮮明であり、クリアーであり、非常に強いエキス、スパイスの効いた色が出ます。その結

果どうでしょうか、みんな鏡に映してみて、自分が浮き上がってしまいます。

自然の色でしますと、まったく自分と同じ DNA をもった仲間ですから、当然絹にしても、この絹の素材と人間の皮膚とまったく同じアミノ酸です。ですから当然似合いすぎる。あまりにも似合いすぎて自分の存在が弱く見えてしまうぐらいです。しかし化学染料色は強いピュアな色を競い合います。目に入ってくる色が強力にひとりひとりの中に、無数に、無条件に飛び込んでくる。それだけに目から入ってくるストレスも、大きなストレスとして残されているのではないかというのがわれわれの考え方です。自然の色は実に穏でやかあり、実におとなしくあります。自分は目立ちません。目立たないから、静かでありますし、穏やかであるわけです。まあそういうような考え方もあっていいんじゃないかと思います。

○社会を闊歩する成果

ですからこういう廃棄物ゼロ・エミッションから生まれる自然、そしてこの自然から生まれる自然の色を着た人たちにどのように都市空間を徘徊してもらうか。わたしは先ほどご紹介いただいたように、美術館、アートの世界もやってきております。しかし「アートの世界はもうやめた」と、いうことに至りました。あれは、やってもやっても上に行けば行くほどガラスの箱の中に入れられてしまう。動物園の檻の中の動物になってしまう。素晴らしいものを作れば博物館に入ってしまう。ガラスケースの中に入れられてしまう。そんなんでは何ら「社会的意味」がない。

本当に人類にとって必要なものは、その時代、時代を闊歩していくものでなければならない。社会の中で、都市空間の中で自然の色が歩くにはどうするのかと、いうことです。もちろん、自然の素材、自然の資源、天然の資源と、環境問題というのは相反する、大きな相反する問題がありますが、そういうこともしっかり考えながら調和を試みながら、運営をしていくということに非常に大事なところがあるのではではないかと考えています。わたしどもは、そういうことで集まってきた集団なのです。

○「森の技」流通システム

生産システムの中では現代の社会と少し違い、タブーとされている生産システムの考え方を明日に向かって、毎日のように作り上げていっています。でもこういう生産システムを受け入れてくれない流通構造がまだまだあります。新しいこ

とや実績のないことに対して非常に消極的で、実績をなくしてしまうと取り戻すことは非常に難しいという流通構造があります。それで、わたしどはグループの会社を作りました。

物流の問屋業、それから小売業、直営店も百貨店もすべてもっています。小さいながら地域の範囲の経済性ということで生産はやっていますが、この範囲の経済性というのは生産システムのなかでの話です。流通システムのなかでは情報化時代に乗って、多面的に、広域的に、一元的にやるという考え方をしています。また一方で、いままでのひとつの生産システムのなかの考え方、ジャスト・イン・タイムというようなものを「規模」から「範囲」にしていっています。

いままで京都で集積してきたものは、たとえば伝統産業に絹織物、西陣織というひとつの別個の業界がありました。そうではなくて、わたしどもは絹織物をするということにたいして自然染めをやる。自然染めをやってそこから出た廃棄物を陶磁器に使う。そうしてさらにそれで消化しきれないものを和紙に使う。そうして消化していく。そうするとずいぶんそこに関連する事業ができます。いままでの横並びの同業仲間の業態、業界ではない、ひとつの新しい「ネットワーク」、新しい生産システムができてきます。まあ「ゼロ・エミッションシステム」と言ってもいいかもしれませんけれども、そういう産業生産システムを作っていく。そうしてそこからでき上がったものを今度は流通、物流にたいしてはやはり現在やってきた一元化、今度は規模の経済性というものを持ち込んでいったらどうだろうか、というのが、わたしどもが次にめざしていく経済性であります。

○支える理念

こういうことを毎日願ってですね、わたしどもの社内では、混沌とした中でねじれ現象を起こしながら社員全員が頑張ってきています。ただただ支えになっているのは、いま申し上げたようなそういう地球環境問題、あるいは人間と自然の共生ということの大前提にわれわれはある、ということです。そして企業は何のために社会に必要とされているのか、あるいはそこに参加するひとりひとりの、企業を支えていく人たちは何のために参加するのか。それは、経営の、規模の経済性でもなければ、決して生産性の一元化でもない。「何のために生きてきたか」と考えながらやっています。もっともっとわたしどもにいま迫っているところの必然的な問題を、わたしどもは「絹資源」というものを足元に置いてやってきたわけですから、その中で精一杯、何が社会の中で参画できるかということを

やってきているのが現在の企業活動です。

○染織道

そしてさらにわたしはもう一つの活動を同時に始めました。それは、染織道ということです。要するに「森の技」をかたちに変えて、型にしていこうということです。つまり「作法」にしていこうということです。そのため、「八法」という8つの作法を作りました。まず「染色法」、自然の草木、虫から色を抽出する作法です。それから「製糸法」という作法です。繭から絹糸を作る作法です。それから「紡糸法」、繭とか、あるいはウールとか、綿とかから紡ぐ作法、そして「績糸法」といいまして、植物繊維、麻とかの植物繊維を績む作法です。植物繊維から糸を作る作法です。そして今度は「絡法」といいまして、繊維を絡まして1枚の布をつくる、そういう作法。そして「組法」といって、糸を回して、円運動をさせることによって、これはもっと原始的な糸の構築方法、人類がいちばん最初にする糸の構築ですが、複数の糸を円運動にのせてロープを、紐を作っていくという作法。そして「編法」、1本の糸で布を作っていく、あるいは立体的な3次元の形を作っていく、あるいは「織法」という、上下と水平運動を組み合わせることによって、繊維で平面を作っていくという作法。これはすべて30　センチ四方の中でやれる作法です。

○「モノ」から「コト」へ

わたしがこの染織道というものを作ったのは、いま日本のシルク、あるいは自然繊維のもので海外にこういう自然運動、あるいは自然のテキスタイルを復元させるということにたいしては、大変不自由で、ものを通してやるということは関税を含めて摩擦が多いわけです。この染織道で行きますと、先ほどご紹介があったパリもそうですし、ウィーン、ニューヨーク、ボストンでも招請を受けて染織道をやりますが、そういうことで、海外での実践についてはいっさい経済摩擦がありません。持っていって、講習料をいただいて、交通費は向こうにご負担いただいて、講習料にたいして税金を払っていくだけです。ものを持ち込みますと、それにたいして通関手続き、またそれが売れ残ったら持ち帰るときにまた云々で非常にややこしい問題があります。この染織道を持ち歩くとですね、「現象の美学」とわたくしどもは申し上げておりますけども、自然の色が美しく染め上がる、染めた結果のものではなくて、その実際を体験していただく、その現象の美を体

験してもらうという喜びを、自然と人間のあいだにあるということを体験してもらうことができます。いま世界各地でご招請いただいたところには、そういうかたちで出ていっています。まあ年にだいたい6回ぐらいを基準にスケジュールをやりくりしまして、だいたい1週間単位ぐらいで世界各地に出掛けています。

わたしどものこういう「森の技」、廃棄物ゼロのものを作って発表しますと、非常に特殊な型ばかりの集団になりますが、こういう染織道というかたちにしますと、小学生、あるいは大学の一般的な講義、あるいは男女、老若男女を問わずに参加いただける。そして特別な方に限らずに、誰にも参加いただけるという型になります。たとえば、ニューヨークでわたしがもし、自然のテキスタイルを中心にして展覧会をしようと思いましたら、大変たいそうなことになります。ウィーンでは、国立民族博物館がわたしの展覧会を 90 日近く開催してくれました。たとえばニューヨークでやろうと思いますと、メトロポリタンでやるのか、あるいはどこかにお願いしようとすれば、たいへんな費用がかかります。そしてそこにお見えになる方、特別な方たちだけなってしまいます。もっと自然のテキスタイルというものは、特異な方だけでなく、みんなが共有すべき問題であるということだと思います。

去年の7月には、箱根の丹沢の山に金曜日の夜から2泊3日で「自然から学ぶ子供の教室」というのにゲストで呼ばれまして、60 人の子供たちと丹沢の山の中で共に生活をしました。そして藤づるをとったり、それを割いて籠を作ったり、あるいは植物を採集してそこから色をとったり、あるいは土を掘って泥染めをしたり、子供たちと一緒に親しむことができました。これもひとつの染織道の「現象の美」を、自然と人間との体験といいますか、そこに起こる現象をお互い見つめ合おうということでやっています。これには国境がない世界、ボーダーレスな世界ということで、ずいぶんこれによって普及活動が進んできています。「なぜ自然染織なのか」、「なぜ自然の繊維なのか」ということを一歩一歩それによって普及させていくということです。

現在日本は、絹の世界一の消費国です。最近は中国の安いものが低価格で入って、若い人たちの中にも一部入って来ているかもしれませんが、まだまだ若い人たちには支持されるところまで来ていませんけれども、絹をまとうということは、非常に快適なことです。そして決して贅沢なものではなくて、わたしのように半年間ずっと着ていれば安いものです。クリーニング代も洗濯代もナシでやってたら、本当に安くつきます。

おかげさまでわたしどもの企業グループも、いままでは伝統的な着物を中心にした研究の方に没頭していましたが、いまではそういうくず繭を中心とした商品がたいへん大衆といいますか、一般の広い範囲でこの自然の色がご理解いただいて、非常に大きく普及しているというのが現状です。高い成長率が最近できはじめて、ようやく企業のペースに乗ってきて、来世紀に向けてますます重点的にこの仕事をしていきたいと考えています。

○ヒトとともに歩むモノ

自然の色でコチニール（南米の昆虫の一種）などで染めますとピンクのＴシャツなんかできるんですけども、そのコチニールで染めたＴシャツをお客さんが買われて、汗をかいて「色が変わりました」と言っておしかりをうけることがあります。洗濯していくとそのうちなくなるんですが、色が変わるというのはその方の体調が良くないときなのです。調べていただくと分かるんですが、人間は体調の悪いときは酸性で、体調の良いときはアルカリ性の汗をかくのです。コチニールで染めると酸性の汗をかいたときに変色するのです。おもしろいことに、アルカリ性の汗のときではそういうふうに変色しません。自然の色というのはいろんなそういう要素で色が落ちたり、変わったりするやつがあります。人間の汗によって、健康診断ができるのはおもしろいのですが、でもお客様からはおしかりを受けます。わたしどもは、販売の、売場の前線では、お引き取りをしていますが、「実は、こういう理由で、こうなりました」ということをお客様にお知らせしております。

それからよく「このくず繭の靴下は快適で非常にいいんですけども、すぐ穴が空いてしまう」と言ってお客様からわたくしよく苦情を聞きます。わたしはお客様に申し上げます。「ナイロン靴下、絹靴下、履き心地はそれは絹のほうがいいのは決まっているじゃないですか。快適でいいですよ」。「でも穴がこうあいては困る」。「でもお客様よくよく考えてください。そのナイロン靴下は穴があきにくいですが、本当に真剣に物事を見ていただいたら、その靴下のかかとと、あなたの皮膚の方に穴があいています。ナイロン靴下はあなたの皮膚より強いから、あなたの足のかかとの皮膚をやぶっているんです。あなたはそれを感じていません。シルク靴下、くず繭などは角のところで破れやすいのです。それはかかとを保護しているんです。かかとと、人間の皮膚と同じ強さですから、人間の皮膚に穴があく代わりに、あなたの代わりにこれに穴があいたということも事実なんで

すよ」ということをよく申し上げます。そのときは「ああそう」と言って帰られる。またおなじようにやっ来られて「伊豆蔵さん、あれは最高にいいんですが、あれで破れないのは作れないの」とよくおっしゃる。「破れるからいいんです」と答えています。

どうでしょうか、戦後の日本の工業社会が作り上げたモノは「変化しないものを尊し」と、コマーシャリズムでどんどんと仕上げられてきました。これは土に返らないということです。「お客様、あなたもどんどん喋っているうちにお年を召していくではないですか。老けていくではないですか、変わっていくではないですか。それを同じく変わらないことを望むことは、わたしどものやっているのは変わることをやっているんです。変わって最後にはなくなることをやっているんです。土に戻ることをやっているんです」。これがわたしどもの営業の最前線、売場の直営店、あるいは百貨店現場においてお客様とのあいだでいちばん時間をかけて説明しなければならないことなのです。

合板で作った変わらない机、これは傷がつきません。むかし熱いやかんを置いてもあとに型が付かないというコマーシャルがありました。むかしテーブルというものも一枚の板でした。いま全部こういうプラスチック合板です。まあ資源素材の問題も、環境の問題もあるかもしれませんが、でもその一枚の板は傷は付くけれども、使っていけばその古傷はある記録であり、歴史であり、人間を刻んでいく、時を刻んでいくものです。そしてその変化する、傷が付くからその時代が記録として手に残されている。でも傷が付かないものは、10 年、20 年使っていって、みんなほかしてしまいますね。傷の付く、痛む板は、上をまた、本当は削らない方がいいんですけども、清潔感を求められる方は削られる。そうするとまた真っ新になります。1 枚板は、わたしどもでも、親からいただいた 1 枚板のテーブルは決して捨ててはなりません。それは、板をスライスしたら真っ新になるんです。木というのは、時代が経てば経つほどよくなっていきます。安定していきます。そういう時代とともに変化していくものなのです。

「森の技」がつくり出すものというのは、作ったときが最低なんです。年を経ていくごとに良くなっていく。でもいまの工業社会がつくり出すものは、できたときが最高のものです。使っていくとどんどんダメになっていく、いやになってしまう。そして捨てる。そしてごみの山を作ってしまう。行政にしても、焼却場だけは作っても作っても追いつかない、という状況です。みんなどんどんものを捨ててしまう。「なんとかなるだろう」「誰かがどうにかしてくれるだろう」

と思っていますが、この辺の自覚を、ひとりひとりがもっともっと心、肝に銘じていけば世の中は変っていくだろうと思っています。「森の技」のなかではそういう掟とルールはいっさい通用しないわけです。「森の技」の掟、ルールというのは、そういうのは許されない。大切にものを使い、資源を大切にする。ものを大切にするということは人も大切にするということです。

○コトを見いだしたヒトを

ここ3年間わたしは、求人を新卒のリクルートはしなくなりました。最近は一般の人をとっていこうという傾向です。新卒の方は非常に初々しい、素晴らしいんだけども、わたしがやめた理由に、就職戦線、会社訪問が解禁されると同時に、怒濤のように集中してやっていく、職を求めていく、アリが甘い砂糖をむさぼるように集中していく、学生さんの姿があります。わたしは、失礼かもしれませんが、そういう姿を見て非常に残念だと思っています。もっともっと社会にでて、「いったい自分は何をするのか」ということを考えてほしい。「あそこの会社は一流で、有名で、いいから、安心だから」ということだけを求めるのではなく、「自分はいったい何をするのか」、「自分の力でいったい何をしたいのか」ということを見極めるような人たちがもっともっとでて欲しい。

わたしは、リクルートの求人誌にいいことばかり書かれて、群がってくる人たちでは、「森の技」の掟にはまることはなかなかできないと思います。わたしどもは、能力を問いません。いままで全部そうですが、人を拒まず、でていく人も拒まないというのがわたしの会社です。わたしの会社には若い人がたくさんいます。伝統産業だから年寄りばかりと思われるかもしれませんが、うちほど若い人がいるところはありません。またうちほど世間で言う「劣等人間」がいる会社もありません。わたしは人を能力ではかってないからです。本当に自分がその中で自分の仕事を見つけて、見つけられる人が欲しいということから、そういう人たちにきてもらっています。

京都は、それがつくられてきた歴史を越えてさらに新しい革新をしていかなければならないときに来ています。そういう時こそみなさんが、地に足を着けて、決して華やかなものばかりを追いかけてないで、「いったい現代社会、あるいは地球社会にとって何が必要か」ということを考えることが大事だと思います。わたしは素晴らしいことが、これほど大事だと思われるものほど、世の中から消えていくことが非常に多いと思います。「わたしの目が狂っている」と言われたら、

それまでです。しかし私見では、みんなが相手にしない、若い人が寄りつかない、みんなが馬鹿にしているところに素晴らしいものが多くあるのではないかと思います。

いまのプラスチックとかガラスができる前は、柿しぶを絞って、それを表面処理剤として使っていた。それを木に塗りますと、防虫剤、防腐剤になります。そして日が経っていくとベージュ色が焦げ茶色になっていく。一時流行った「酒袋」に使われていた布で、そのお酒を絞る布に柿しぶを塗っておきますと、チョコレート色の深い色に、時代が経つとともに変化してでき上がっていくというような素材がありました。それを見て何かほっとするものがあるのでしょう。一時、むかし使われた酒の絞りぎれが飛ぶように使われていったりしました。そういうものは本来捨てられる運命にあります。現代のルールでは。でも「森の技」から生まれたものというのは、決してそうではなく、使い込むほどよくなっていくものです。

これから人口がますます増えて、地球環境がますます厳しくなっていくなかで、わたしどもがとっていく企業活動として、この自然との対話のなか慎重に、懸命に努力して小さい力を結集させ、少しでも人間の生活と自然の環境というものとが循環する社会にするために、この時代を新しい時代になるためのステップとして踏まなければならないと考えています。みなさん方にも是非「森の技」というものがあるということをひとつ頭のなかにご認識として抱いていただきたいと思います。ハイテクのような技術がいま非常に高く評価されていますが、一方、まったく静かで、まったくみなさん方の情報も入ってこないこういう「森の技」というものが、風前の灯火の「森の技」というものも多くあるということを、今日のことを通して是非知っていただきたい。またこれも社会にとって大きな、大切であると考えています。